

一般社団法人
日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
VOL.48 No.3
2024.6.1
(通巻 284 号)
禁転載

CONPT

Conference for Newspaper
Production Technique-Japan

広報委員会編集
編集人 井上 努
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>



目次

CONPT2024年度事業計画	3
新局長に就任して	大分合同新聞社 執行役員印刷センター長兼印刷局長 甲斐 浩司 4
	デーリー東北新聞社 システム局長 渡邊 聡 5
	中国新聞社 執行役員技術局長 赤木 潔 6
	日本経済新聞大阪本社 製作本部長 奥田 徹哉 7
新聞メディアの潮流 欧州報告(12)	在英ジャーナリスト 小林 恭子 8
楽事万才	山梨日日新聞社 デジタル技術局集配信管理部長 石川 秀和 11
第132回技術懇談会	12
第4回定時総会開催	12
美味あっちこっち	コダック 久米 邦雄 13
わが職場あれこれ	新潟日報社 印刷局印刷発送部部长 佐藤 正晴 14
会員消息 CONPT日誌	14

- 表紙写真提供：CONPT TOUR アーカイブ（ベルギー・ブルージュ）
- 表紙製版：(株)デイリースポーツ
- 組版・印刷：(株)デイリースポーツ

JANPSに替わるイベントを企画

CONPT 2024年度事業計画

日本新聞製作技術懇話会(CONPT)は、5月16日、第4回定時総会を開催し2024年度の事業計画を決定した。

新型コロナウイルス感染症の第5類感染症への移行に伴い、対面による事業活動が活発化し、2024年1月には4年ぶりとなる「新聞製作人 新年合同名刺交換会」が開催された。事業計画では5年ぶりとなるCONPT-TOUR2024を催行。また、JANPSに替わるイベントについて、効果的な情報発信ができるよう新聞協会と協力しながら計画を進める。さらに、新聞社と会員社との対面式のイベントを企画・開催し、CONPTの存在意義を高めるとともに、会員社の増加につなげる。

【JANPSに替わるイベントの企画・開催】

JANPSに替わるイベントは次の2部構成で検討を進める。

A案—新聞印刷工場での実機視察にセミナー、懇親会を組合せた「製作技術研修会」を開催する。

視察先は読売新聞鶴見工場を予定し、11月の開催を目指す。

B案—他の展示会との共催でJANPS同様の展示会を開催する。

2025年2月19日から池袋で開催予定のpage2025にJANPSゾーン設け、CONPT会員社他が展示を行う。

両案について、新聞協会、情報技術・印刷両部会と連携しながら計画を進める。

【技術懇談会】

従来の新聞印刷工場や各種施設の見学・意見交換会の開催に加え、最新の情報や専門的な情報を提供できる講演会などを開催する。新聞社の方々にも参加を呼びかけ、CONPT会員社との交流を促進する。

【CONPT技術研究会】

7月5日に第15回CONPT技術研究会を開催する。インテックから講師を迎え、「地方自治体を救う！富山県が生成AIとマルチモーダルAIで挑んだ働き方改革」のテーマで、地方自治体の業務効率化および働き方改革の実証事例を紹介する。年度内にさらなる実施を検討する。

【会報CONPT発行】

CONPT誌は8月に予定するCONPT-TOUR2024特集号を含め、年間5回の発行とする。また、「新聞製作技術の軌跡」の全回分(第1回～29回)をまとめた合本の販売を継続し、収益増を図る。

【CONPT-TOURの開催】

5月30日(木)～6月6日(木)の8日間の日程で、第45回欧州新聞製作事情視察団を派遣。ドイツ・デュッセルドルフで8年ぶりにリアル開催されたdrupa2024の視察を中心に、フランクフルトの新聞社F.A.Z.とベルギーで多数の新聞や雑誌を印刷するColdset Printing Partnersの工場を視察。あわせてWAN-IFRA(世界新聞・ニュース発行者協会)のIngi Olafsson氏(Director, World Printers Forum)の講演会を実施した。

【会員社増の施策】

「新聞製作人 新年合同名刺交換会」など新聞社とCONPT会員社が対面で交流できるイベントを企画・開催することで、退会に歯止めをかける。JANPSに替わるイベントを契機として、新規会員の入会を促し会員社増を目指す。

(関連記事12ページに)

新局長に就任して

信頼と絆を大切に

大分合同新聞社
執行役員印刷センター長兼印刷局長

甲斐 浩司

「新聞社と販売店は車の両輪」—私が入社した平成4年4月3日創刊記念式の社長あいさつでのひと言だ。新卒で販売部に配属となった私は、長い年月をかけ新聞社と販売店との「強固な関係性」を知ることになる。



世帯数の伸びに合わせた増紙計画。普及率を維持するために、新築だけでなく空き家をチェックして、入居のタイミングをうかがい営業に回った。他紙との激しい競争の中、地元紙として負けられぬと息巻いた。親子ほど、いやそれ以上に年齢の離れた販売店主や営業マンと向き合い、時には機嫌を取り、時には怒られながら目標部数確保のために粉骨砕身の毎日だった。私の20歳代は販売一色、常在戦場の環境下、あっという間に過ぎていった。

30歳代半ばに事業部に異動となった。スポーツ大会や展覧会などのイベント運営は土日勤務が多かったが、そこには楽しむ関係者やお客さんの顔があり、やり終えた達成感を得られることで疲れは吹き飛んでいった。

50歳を過ぎ、どういう形で定年を迎えるのだろうかと考えようになったころ、古巣？の販売現場に異動となった。

20年ぶりの販売現場は以前のそれと大きく変化していた。読者の減少が止まらず、コロナ禍も相まってチラシ収入が激減、さらに配達員不足の労務難も加わった「三重苦」が新聞販売店の経営を圧迫していた。店主の高齢化による廃業でも後任者は見つからない。戸別

配達網を守るために販売部員が店主代理を務めざるを得ない状況も発生している。

新聞用紙等の資材や燃料費の高騰による経営難から、定価改定に踏み切る新聞社が相次ぐ中、弊社も24年2月に値上げに踏み切った。値上げ幅や読者の落ち込み予想など綿密なシミュレーションをした上で策を打ったが、厳しい現実を突きつけられる状況も浮かび上がってきた。

そして今春、印刷センター長に異動となった。値上げ後の対策として落ちた読者の回復等取り組むべき課題がはっきりしていた私にとって今回の異動は驚きだった。

本紙印刷の夜勤業務に立ち会った。業務の本丸をフルで目の当たりにするのは初めてで、大きな機械から刷り出される姿に感動すら覚えた。そんな中気があった。それはコンソールに入力されている印刷部数を見た時だった。毎月の部数動向を把握している社員は販売部と役員くらいと思っていたが、ここにも把握している社員がいたことを知った。

「紙からデジタルへ」は潮流だが、まだまだ紙への信頼は厚く、いかにデジタルにつないでいくかが使命だと感じている。100年以上にわたる新聞販売モデルが今後も通用するとは思えないが、これまで得た読者からの信頼と深い絆は大きな財産だ。

編集や広告など各部門が役割を果たし連携することで新聞社がある。しかし私はその先の販売店まで含めて新聞社であると思っている。販売店が戸別配達を守ることによって発行部数が維持されている。売店に置くだけでは成立しない。読者に届けるまでの一連の流れをもって「新聞」は完結する。

「新聞社と販売店は車の両輪」—30年以上経過し、新聞界の状況が刻々と変化する中、この言葉の意味がより現実味を帯びたと感じながら、今日も安定した新聞発行に向けて輪転機のメンテナンスに励む部員とともにいる。

「システム」という名の生き物と共に

デーリー東北新聞社
システム局長

渡邊 聡

自分が「新聞」を意識したのはいつだったろう。小学生高学年、家庭には新聞が生活の一部として存在していた。毎朝、両親が新聞を読んでいる風景が当たり前だった。子ども新聞などというものはもちろんなく、難しい活字の中、たまに掲載される投稿型のイラストを見ることと、テレビ欄を見るのが楽しみだった。

中学生になると、高校受験のために毎日掲載される受験問題の切り抜きをスクラップして解いていた。社会面でその日の事件や、自分の好きなスポーツ記事を読むようになった。

大学へ進学し、社会へ出てビジネストークをするためには新聞で時事ネタを仕入れておくことが重要だと勝手に思い、生活費で新聞を契約した。新聞を読んでいるという姿にある種のステータスを抱いていたかもしれない。

*

私の新聞社人生は、整理部から割付表なるA2サイズの紙に書かれた紙面設計図を元に紙面を組み上げることから始まった。慣れない新聞社独特の業界用語に振り回されながら組版、新聞製作システムの基礎を学んだ。入社時(1999年)、すでにWEB時代が到来しており、大手新聞社は無料のニュースサイトを立ち上げ済みで、後を追うようにデーリー東北新聞社もニュースサイトを立ち上げるようになった。もともとはハードウェア側の人間



が、マークアップ言語やらCMSやらのテクニカルタームと格闘したのを覚えている。その時代持っていた携帯電話はいわゆるガラケー。世の中は携帯電話でニュースを見ることが少しずつ浸透してきていた。

*

新聞製作の現場は、システムが変更する度に、一夜にしてベテランの社員が新米社員へと変わってしまうほど仕事内容が変わり、技術革新が進んできた。各部門もデジタル化が加速、私が所属していた製作部門も画像系と組版系が統合、すぐにシステム管理部門も統合、多メディア部門も統合していった。気が付けば、入社時の3分の1以下の人数で社内システム全てを管理するようになっていた。

世の中はスマートフォンが手元にあるのが当たり前になり、新聞はネットで知った情報の後追いをする立場になってしまった。生成AIの出現で、「システム」は生き物のように、凄まじい速度で進化していく。毎日聞いたことがない単語が出現し、ついていくのがやっとなのである。

*

そんな激動のメディア情勢の中、社内インフラ管理・運用の中心となるシステム局長をこの4月から任されることになった。近年のシステム現場は、業種を問わず単なる社内システムの運用部署ではなく、多様化するビジネスにおいて全方向に対してアンテナを張り、イニシアチブをとらなければならない重要な部門になったといえる。

弊社では、来年度に新聞製作システムの更新を控えている。さらに、今まで社内システム管理で培った技術力と新聞メディアの信頼力を活用して、新しい収入を得る試みも強化していくつもりだ。これからも進化を続ける「システム」という名の生き物とどのように向き合い、有益な部分を現場へと落とし込んでいくか、試行錯誤は続く。

人間万事塞翁が馬

中国新聞社
執行役員技術局長

赤木 潔

1990年(平成2)の入社から、編集局の外勤記者、内勤(整理記者)を約30年間務めた後、5年前に技術部門へ異動となった。編集局時代の最後は整理部の軟派デスクとして紙面づくりの最前線に携わってきたが、紙面降版ボタンを押した後の工程はほとんど知らぬまま。仕事を終え一刻も早くビールで喉を潤すことしか考えていなかった。技術局の要職・制作管理部長への「転職」は、まさに青天の霹靂(へきれき)であった。



中国新聞社の技術局は、上流のシステム部門から下流の印刷、そして輸送の管理まで担う。システム部門の専門用語「仮想化基盤」「プロキシ」…、印刷部門では「ペースター断紙」「見当ズレ」…。現場で使われる用語に最初はチンプンカンプン。先輩、後輩に教えを乞いながら、悶々とした日々が1年を過ぎた頃、またも青天から降ってきたのがコロナパンデミックだった。

社内全体が戸惑い、皆が非常事態に右往左往。技術部門ではテレワークやウェブ会議設備の早急な構築が最優先事項に位置付けられた。技術的な知識は追いつかぬままだったが、編集局を中心に社内各局からの要望に応じ、前例のない緊急時対応が続いた。「編集局とのつなぎ役」が自分に課せられたミッションと自らを奮い立たせた。これまでの社内人脈が後押ししてくれた。

「人間万事塞翁が馬」。何が転機になるか分からないものだ。コロナ禍により、技術局での自分の立ち位置を、予期せず確信させられたわけだ。

4年間の技術局次長を経て、今年2月から技術局長を拝命した。コロナ禍はようやく収まりを見せてきたが、「頼りない新米技術局長」は相変わらず、シニアスタッフの先輩や後輩たちに「おんぶにだっこ」の状態。

中国新聞社の印刷と輸送は、グループ会社である「中国新聞印刷(広島工場)」「福山制作センター(福山工場)」「中国新聞輸送」が担う。手前味噌だが、意思疎通も円滑に出来ており、頼りになるグループ会社には、いつも支えられっぱなしである。

*

新聞社の技術部門というのは、なにかと「減点法」で評価されがちだ。新聞制作システムやデジタル発信をトラブルなく作動させ、新聞印刷、販売所までの輸送を問題なく終えて「当たり前」。「当たり前がどれだけ大変な事か分かっているのか?」と大声で叫びたくなる時もある。

愚痴はさておき、技術部門はミスやトラブルを出さないことが、最優先の任務であることは間違いない。ただ、人間は残念ながら「ミスを犯してしまう生き物」である。

例えば、システム関係では紙面管理情報の設定ミス、印刷では刷版の掛け間違い、輸送では販売所への誤降ろし等々。近年は各部署で人材不足が深刻化する中、ミス防止を「熟練の技」や「ガンバリズムの根性論」に頼るのは限界を迎えている。もちろん、人為的ミスを最小限に抑える努力を惜しんではならない。一方、人間の犯すミスを最新テクノロジーでリカバー、または未然に防ぐことが、人類の英知であるはずだ。

*

CONPTメンバーの方々には長年にわたり、新聞製作における技術サポートを担っていただいている。共に新聞業界を盛り上げ、維持してきた同志でもある。新聞業界がさまざまな難局に直面している今こそ、協調、共闘の時だと感じている。

成長に貢献し合う関係を

日本経済新聞大阪本社 製作本部長

奥田 徹哉

なぜ新聞業界を就職先として考えたのか、そのきっかけの記憶は定かではないが、「業界ナンバー1の会社に」という誰かの言葉が後押しとなり、狭い範囲ではあるが経済新聞では最大手の日本経済新聞社を選んで入社したことは覚えている。“選んで”とは何様かと我ながら思うが、バブル時代のその当ても売り手市場で世間知らずの若造は上から目線であった。入社当初も仕事には身が入っておらず、毎晩個人的に飲み歩くものの会社の飲み会はことごとく参加せず、今で言うところのエンゲージメントなどさらさらしない社員で、よくクビにならなかったと会社の懐の深さに感じ入る今日この頃。そんな私もすっかり大人になり、働く場を頂いたことに感謝しながら日々滅私奉公している(つもり)。

*

最初の配属先ではアウトソーシングが世の主流になるまでアセンブラやC言語でプログラミングをしていた。入社10年目頃に記者端末やデスク端末といった出稿系システムのキャップを務め、機能やデザインなど実務的な決定権を与えてもらえたことで、責任感とともに仕事の楽しさを学んだ。その頃で最も記憶に残っているのは、ワシントンD.C.の米商務省内に新端末を設置するミッションで、入場は1名のみ、制限時間30分、時間内に終わらなければ強制退場で再入館の申請に2週間かかる(3日後に帰国のため実質リトライNG)という一発勝負。いざ現場に入ると事前に開示されていた情報とは配線もネットワーク設定も全く違う環境下であることが発覚、準備していた手順書や端末設定が使えない事態



に。まだインターネットも普及しきれていなかった時代の完全隔離状態の中、必死に1から作業するもののリミットの30分を超過。M16ライフルを携えた数人の衛兵が退場を迫ってきたが、あらかじめ5分遅らせておいた腕時計を見せてごまかしつつ29分(実際は34分)でなんとかミッションクリアした。事前準備が役に立たないこと、役に立つことを同時に体感できた出来事だった。世の中、気合でなんとかなることも学んだ。

その後、製作局へ異動となり、上流系システムから工場の生産設備へと担当が徐々に下工程にシフトしていき、現在に至る。こうして振り返ると、任された業務で問題を解決する成功体験を繰り返すうちに仕事や会社への愛着が大きくなっていったように思う。エンゲージメントの強化である。私ほど単純でないとは思いますが、若者にも自力で解決する成功体験を多々させてあげたいと思っている。

*

一方でメーカーのみなさまには随分と無理を聞いて頂いた。この場を借りてお礼ならびにお詫び申し上げます。そんな私が言うものなのですが、ネット検索したところ、エンゲージメントとは、従業員の会社に対する愛着心や思い入れという意味であるが、最近では個人と組織が対等の関係で互いの成長に貢献し合う関係のことを指す、とあった。「個人と組織」を「メーカー・輸送会社と新聞社」に置き換えれば、大幅な部数減が続く新聞製作部門の現状を乗り越えるひとつのキーワードになるのではないかと。互いの成長に貢献し合う関係が今こそ求められているように思う。みなさんと知恵を絞っていきたい。

4月から大阪勤務となった今年は、大阪本社発刊100周年にあたる。来年は大阪・関西万博が開催。大阪本社として様々なイベントを計画中で、製作部門としても何らか貢献できればと考えている。せっかくのめぐり合わせなので大いに大阪を盛り上げていきたい。

時代の波、「週刊」という決断

在英ジャーナリスト

小林 恭子

◆ロンドンの夕刊紙重い選択

「時代は本当に変わった」。しみじみとそう思わせる事態が発生した。日刊・夕刊紙「ロンドン・イブニング・スタンダード」が週に1度の発行になると発表されたのである。過去5年で発行部数が平均85万部から27万5000部に減少し、負債額が大きく膨らんでいたという。

イブニング・スタンダードは197年前に「スタンダード」紙として創刊され、1859年に夕刊紙となった。かつてはロンドンの路上や駅構内に設置された専用スタンドで、有料で販売されていた。

しかし、1990年代半ばにスウェーデンで無料紙「メトロ」が創刊され、これが英国に上陸することを懸念した英新聞王ロザミア卿が同名の無料紙「メトロ」を1999年から市場に投入する。インターネットの普及で有料の新聞は部数下落が続く一方で、無料で読める英メトロは通勤客を中心にあっという間に人気を広げた。

広告料で運営費を賄う無料紙市場を作り出したメトロは有料のイブニング・スタンダードの脅威となった。イブニング・スタンダードは内容を充実させる、プリペイドカードによる支払いを導入する、3刷制を2刷制に減少させる、人員整理を断行するなど努力したが、挽回は難しかった。2009年、とうとうロシアの富豪で元KGB（ソ連国家保安委員会）情報員のアレクサンドル・レベデフ氏にほんの1ポンドで売却された。同年秋、スタンダード紙は無料で配布されるようになった。

翌2010年、レベデフ氏は左派系高級紙「インディペンデント」を買収する。この時のマーケティング調査で「新聞を読みたい」と思う人が少なからずいるが、「新聞をじっくり読む時間がない」、そして当時的高级紙の価格(1ポンド)が「高い」と見る人が多いことが分かった。そこで10年秋、簡易版「i (アイ)」を創刊させた。中身はインディペンデント紙のジャーナリズムだが、より簡易な文章で記事が書かれ、価格は5分の1に設定。次第にその部数は他家インディペンデントを上回るようになった。2016年3月、インディペンデント紙は紙版の発行を止め、電子版のみの新聞となった。iの方は紙版と電子版の両方での発行が続く。



ロンドン・イブニング・スタンダード紙のウェブサイトを

——考えられる手は尽くしたが…

筆者が「時代は本当に変わった」と思ったのは、イブニング・スタンダード紙が考えつく限りの対策を講じても、日刊紙としての発行が不可能になったことが判明したからだ。今後は週刊になるが、印刷を全てやめて電子版のみとなる可能性もないわけではない。

無料紙メトロは今でも駅構内のスタンドに平積みになっているものの、「電車内で紙の

新聞を読む」という行為は廃れつつある。スマートフォンでニュースやそのほかの情報を得るのが一般的になっているのは日本と同様だ。スタンダード紙の週刊化は時代の流れが如実に表れたものと言えよう。

メディア統制など討論

◆国際ジャーナリズム祭

今年4月、イタリア中部ウンブリア州の州都ペルージャで恒例の「国際ジャーナリズム祭」が開催された。ジャーナリスト、学生、学者、メディア企業の編集幹部などが集まり、500を超えるセッションに参加した。今回が18回目となるジャーナリズム祭の様子を伝えてみたい。

ジャーナリズム祭で議論されるトピックは報道の自由からメディアの生き残り策まで幅広いが、今年はウクライナ戦争、ガザ紛争など戦争の影響やロシア、ハンガリーなど強権政治によるメディア統制が目についた。

ロシアではプーチン政権下、メディア統制が厳格化している。その影響を受けた一人が2021年にノーベル平和賞を受賞したロシアの独立系新聞「ノーバヤ・ガゼータ」のドミトリー・ムラトフ編集長だ。4月19日のセッションで、あらかじめ撮影された動画で参加したムラトフ氏はロシアに居続ける理由を「ロシア国民がまだここにいるから」と述べた。

——国民にとって最優先事項とは

2022年、ロシアの裁判所はノーバヤ・ガゼータの発行免許をなく奪する判決を出した。翌23年、法務省はムラトフ氏をスパイと同義語の「外国の代理人」に指定した。「ロシアの内政外交に否定的な見方を醸成する情報の拡散に参加した」ことがその理由だ。ムラトフ氏は、政治圧力の他に「報道の自由が国民の最優先事項ではないこと」を問題視する。国民は心身の安全や汚職の撲滅、生活水準の方を

重視するからだ。現状では「報道の自由がなければ、汚職は撲滅できないということを国民は十分に納得できていないのではないか」と指摘した。

2月にはプーチン政権を批判してきた反体制派指導者アレクセイ・ナリヌワイ氏が獄死し、世界中に波紋を広げた。未だ獄中に囚われている一人が、ロシアの人権活動家・ジャーナリストのウラジミール・カラムルザ氏だ。昨年4月、「ロシア軍についての偽情報を拡散し、（政府が指定する）『好ましくない組織』と活動を共にした」という理由から国家反逆罪とされ、25年の禁固刑を受けた。

カラムルザ氏の妻エフゲニアさんは4月20日のセッションにズームを通して参加した。エフゲニアさんが夫と会話をしたのは昨年12月。ほんの15分の電話での会話である。エフゲニアさんと子どもたちは今、ワシントンに住んでいる。夫は1日22時間、狭い部屋に閉じ込められているという。「平和が戻ってくるためには、ロシアが民主化するしかない」とエフゲニアさんは語った。先のナリヌワイ氏の妻ユリアさんは夫の遺志を継いで民主化を目指す活動を続けると述べている。エフゲニアさんはユリアさんやほかの多くの女性活動家との「共闘」が最もうれしいことだと述べて、一瞬の笑顔を見せた。エフゲニアさんは民主化を実現するための非営利組織「自由ロシア財団」の啓発ディレクターとして活動を続けている。

AIの未来 期待と懸念

◆世界ニュースメディア大会

5月末、デンマーク・コペンハーゲンでは世界各国の報道機関でつくる「WAN-IFRA（世界新聞・ニュース発行者協会）」の年次総会「世界ニュースメディア大会」が開催された。

報道の自由に寄与したジャーナリストらに贈られる「自由のための金のペン賞」は中米ニ

Golden Pen of Freedom awarded to Nicaraguan journalist Carlos Chamorro

2024-05-27. The 2024 Golden Pen of Freedom, the annual press freedom award of the World Association of News Publishers (WAN-IFRA), has been awarded to Nicaraguan journalist Carlos Fernando Chamorro, editor-in-chief of Confidential, currently in exile in Costa Rica.



Carlos Fernando Chamorro, editor-in-chief of Confidential (Photo: Nick Ffili)

(WAN-IFRAのウェブサイトから)

カラグアのジャーナリスト、カルロス・チャモロ氏に授与された。ニカラグアでは独裁色を強めるオルテガ政権がメディアへの弾圧を強めている。2022年、最古の新聞社「ラ・ブレんサ」紙は全社員を国外に退避する措置を取らざるを得なくなった。国際NGO「国境なき記者団」による最新の報道の自由度のランキングで、ニカラグアは180カ国・地域中164位を占める。

——「報道の自由の炎を維持」

チャモロ氏が主宰する調査報道メディア「コンフィデンシャル」は2018年、政府に占拠されたため、現在はコスタリカから言論活動を続けている。受賞演説の中で、チャモロ氏は「国外にいる報道機関の力だけでは民主主義への変化を起こすことはできないが、「質の高いジャーナリズムを継続することで、あらゆる自由の中でも最も重要な報道の自由の炎を維持したい」と語った。

大会では生成AIについての最新レポートが発表された。経営幹部を対象とした調査では、52%が編集室へのAIの導入に楽観的な見方をしているが、37%が「その影響を懸念している」と答えている。スイスの複合メディア「タメディア」では、AIを導入することによってニュースレター制作・配信の効率が

80%向上したという。

AIの編集室導入について、筆者は少々の懸念と期待を持っている。「AI・生成AI」と聞いただけで恐怖感を持つわけではない。すでに、ニュースの生成において様々なレベルで自動化が急速に進んでいることは承知している。個人のレベルでもGメールを使う時に校正用の単語や文書が提示されるため、助かることが多い。音声を文字化するアプリも頻繁に利用している。ただ、疑問に思うのがAI利用によるクリエイティブな面への影響だ。実際に現場に足を運んで取材する行為や「考える」作業は人間が行うので、心配することないという分析をよく目にする。しかし、安心して良いのだろうか。

——実験を繰り返して

筆者は、5月22-24日にボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボで開催された、国際新聞編集者会議(IPI)の年次総会に出席したが、AIをテーマにした複数のセッションの中で、ニュース編集室へのAI導入では先駆的な米AP通信社のロン・ニクソン氏が登場した。「AIを使って、ニュースの解説記事を書かせるなど、よりクリエイティブな作業をさせているのか」と聞いてみた。ニクソン氏によると、APでは記者が思考をしながら文章を作る部分ではAIを使わない規則があると答えた。

追加の質問をすることはできなかったが、本当に聞いたかったことは「クリエイティブな部分もAIにやらせてみるという実験をするべきではないのか」だった。私たちはAIとニュースの編集作業の関係を土台から改めて見直すときに来ているのではないだろうか。そのためにも、「ここからはAIを使わない」と限度を決めるのではなく、際限なく実験をしてゆくべきではないだろうか。

誌上 CONPT-TOUR

楽事万歳

天使のバラ

山梨日日新聞社
デジタル技術局集配信管理部長

石川 秀和

『チャレンジローズだと思ってがんばってください』

現在バラを初めて3年目。本格的に園芸を始めて1年目に師匠と仰ぐYoutuberの『初心者にはバラを買うのは3本まで』との教えを守り、なんとかバラの育成を成功した。そして2年目。気難しい、しかし咲いたときの美しさ、香りは随一と話題のバラ「ガブリエル」にとうとう手を出してしまった。地元にある全国でも有名なバラ苗専門店の店長さんに相談したところ、背中を押してもらったのだが、樹勢が弱く、気難しいと言われるこのバラを育てる上で、冒頭のコメントをつけられた。



今年咲いたガブリエル

「ガブリエル」はブルーのバラ「ブルーヘブン」を発表して映画にもなった河本純子さんの作品。天使の名前を冠するバラの「ヘブンシリーズ」の一つだ。天使の羽のようなウェーブのあるグレーがかかったホワイトの花弁の中心が、淡い紫色のグラデーションになっている。その繊細さ、美しさは私の心も掴んだ。香りも強香で非の打ち所がない。

*

花好きの母親の影響で、娘よりも息子の自分の方が若い頃から花に興味があった。学生

時代は花屋に憧れて園芸店のバイトをしていたこともあった。園芸を始めてすぐ見始めたYoutuberに「花の女王バラを、きっとあなたも手に入れたくなります」—その言葉に乗せられ、購入したところ見事にハマった。花の色、大きさ、形、香り、花期、樹勢、樹形、耐病性、などなど、個性豊かで、選ぶだけでこんなに楽しいものはない。何より園芸は未来を想像する趣味なので楽しい。そして、知れば知るほど思うことは、バラは他の園芸植物よりもとてもか弱く、とても強い。その理由としてバラは病気に弱く、虫もつきやすいので、それぞれの消毒が基本必須となる。その問題はどのバラでも起こるが、枯れるに至ることはまずない。枯れてしまうのはカミキリムシの幼虫が入って徹底的に食い荒らされた場合だけ。問題を取り除く勉強をすれば基本的に克服できる。

バラは手が掛かる分、こちらを成長させる度量があるといえる。新入社員の研修をしながら、システム管理をしていた入社当初の経験がよぎる。日々の小さな問題を克服していった小さな成功を手に入れることは人を成長させる。仕事を覚えていくときは基本的にそうだ。「バラのような寛容的な中で物事を覚える機会があれば理想的だな。そんな環境を新社員にも作ればいいな」バラの世話をしながらぼんやり思った。

*

大苗(2年生苗)を購入して1年目はできれば摘蕾をして花を咲かせないほうが苗の成長になるといわれ、花を咲かせるのは最低限にしてきた。病気が多くなる梅雨に向けて消毒類の用意や知識、多くの対策は身につけた。ガブリエルを手に入れて2年目。待ちに待った一番花は開花が少し遅くヤキモキしたが咲いたときの美しさは、やはり格別だった。玄関を入るときに軒にある天使のバラをひとしきり眺め、香りを楽しんでから家に入るのが現在の楽しみとなっている。

全日空機体工場を見学

—第132回技術懇談会



日本新聞製作技術懇談会は第132回技術懇談会として3月14日、羽田空港の全日空機体工場を見学した。会員社から11社17名と事務局2名の19名がANA Blue Hangar Tourに参加した。

全日空では現在、約300機の航空機を5,000人のスタッフで整備している。まず、整備部門(e.TEAM ANA)の各種整備内容について説明を受けた後、格納庫(Hangar)に移動した。航空機を同時に7機収納できる第1格納庫は幅230m、奥行き100m、高さ42mの巨大空間である。

従来、航空機の胴体はアルミ合金などの金属で構成されていた。今回のTourで間近に見たボーイング787は、機体構造材に炭素繊維強化プラスチック(CFRP=Carbon Fiber Reinforced Plastics)を使用している。ゴルフクラブのシャフトや釣竿、テニスラケットなどに使用されるCFRPはアルミ合金に比べ軽量で強度が高く、機内の気圧を高めることができる。

富士山の3倍の高さ(約1万メートル)のフライトで、従来は機内が富士山の5合目付近の気圧であったが、CFRPの機体では3合目付近の高い気圧となり、耳が痛くなりにくい。CFRPは金属と異なり腐食の心配がない。そのため、湿度を高く設定できるので、乾燥が少なく肌に優しいという。また、787は窓が大きい。これも強度が高いCFRP製機体構造のお陰である。

主翼を見ると、先端が反り返っているのが分かる。航空機が飛行する際に空気の流れを制御し、空気の渦を減少させるためである。これにより、燃費が約5%向上するそうだ。

今回の見学では、乗客目線ではなかなか気づかない航空機の秘密を垣間見ることができた。

第4回定時総会を開催

一般社団法人 日本新聞製作技術懇談会

一般社団法人日本新聞製作技術懇談会は、5月16日、日本プレスセンタービル10階ホールで第4回定時総会を開催した。日本新聞協会から技術委員会の中村正純委員長(産経新聞東京本社執行役員制作印刷担当、制作局長)、勝田洋人編集制作部長、桜井哲也編集制作部技術・通信担当主管を来賓として迎えた。会員社からは23社31名(オンライン参加7名含む)が出席した。

開会挨拶で、清水英則会長は、日本の事業

活動が賃上げ、物価高、円安などにより今までとは異なるフェーズに進んでいることに触れ、CONPTの活動も新たな段階に入っていると述べた。JANPSが開催できないのは、CONPT会員社の出展意欲の低下が主な原因であるが、情報発信の意欲は依然として高い。現在、新聞協会とともにJANPSの代替イベントを検討している。新聞社からは生産コスト削減と少ない投資で大きな成果を求められているため、業界の現状に即した情報発信が重要であるとした。効果的なイベントとなるよう、CONPT会員社に積極的な参加を呼びかけた。また、CONPTは会員社の事業活動

日本橋海鮮丼 つじ半 (東京・日本橋)

今回のご紹介は海鮮丼となります。東京駅から徒歩圏内なので、アクセスしやすい立地です。ラーメン業界のつけ麺風雲児「つじ田」と、「日本橋 天井 金子半之助」のコラボレーションで実現したユニークな海鮮丼専門店です。

9種類のアラレの具材にイクラやウニ(値段によりトッピングは異なります)が乗っており、わさびを溶いた卵醤油をかけます。ネギトロでまとめ上げた具材と黒胡麻を少し混ぜた白米とともに食べ、途中で鯛出汁を入れてお茶漬けとして仕上げます。この時ご飯を全部食べてしまっても、無料で追加できます。小鉢の刺身(胡麻醤油がけ)を利用して、お茶漬けとして二度楽しむ満足感も大きいです。

美味あつちこつち



海鮮丼

カウンター10席程度の小さいお店ですので、いつ訪問しても数十人が並んでいます。ご注意ください。13時過ぎがお勧めです。



二杯目お茶漬け

コダック
久米邦雄

を継続的にサポートする役割を担っており、ぜひご活用いただきたいと語った。

技術委員会の中村委員長は、新聞業界が読者減による部数の減少、新聞用紙を始めとする資材や電気料金の値上げにより厳しい状況にあり、印刷体制の見直しが進んでいる。今求められているのは効率化と省力化であり、新聞社とメーカー・ベンダーのつながりが重要であると強調し、これからもCONPT会員社と共に歩んでいきたいと述べた。

勝田部長は、復活したCONPT-TOURが有意義なツアーになることを望むとし、生成AIの登場が社会に大きな変化をもたらす中で、CONPT会員社のメーカー・ベンダーの技術力に期待したいと挨拶した。



2023年度の事業報告では清水会長の全体報告に続き、評議委員会、3委員会の報告があった。また、JANPSに替わるイベントについての説明も行われた。議案は2024年度の事業計画など5件で原案通り承認された。

総会後に開かれた理事会では、木暮喜彦氏が専務理事に再任された。その後、会場を9階の大会議室に移し、立食形式で懇親会を開催。参加者同士の懇親の輪が広がる中、下平理事の中締めでお開きとなった。

◇本誌に連載しました「新聞製作技術の軌跡」全29回を一冊にまとめました。購入方法は、CONPTウェブサイトでご案内しています。
<http://conpt.jp/kisekibook.html>



定価2200円(税込み)

あれ これ わが職場

技術力の維持

新潟日報社 印刷局印刷発送部部长 佐藤 正晴

40年近く前の入社後、職場の中が分かってくると様々な工具が見えてきた。スパナやレンチ、ドリルやサンダーが普段使う工具だが、ジグソーなどこれまで見たことがない工具もあった。印刷部なので仕事の中心は朝刊印刷。下っ端なので輪転オペレーターはまだだが、モーターの唸る音は気持ちを高ぶらせてくれ、夜勤は楽しかった。また、夜勤と同じように楽しかったのが、昼勤時のメンテナンス作業だった。

ある日先輩からキリ(ドリル)の研ぎ方を教えてもらった。これをしていたのは1、2名だったようだ。太いきりはすぐ覚えたが細かいキリは研げても切れ味がもたず、先輩の域には遠く及ばなかった。しかし10年程してこの技術に助けられる時が来る。

弊社は2002年に輪転機を更新したが6、7年程過ぎたある日の午後、折機の部品交換中に「ボルト折損が発生した」と呼ばれた。折れたボルトが残り折機が回せない。メーカーは夜勤までに来られないので修理せよとなった。

ポイントは折れたボルトが抜けるか、ネジ山修理の下穴を正しく開けられるかだった。治具もない中だがキリを良い状態にできたこともあり、ボルトを抜くエキストラクターの下穴(細い穴)、その後の雌ネジ修理で開ける下穴(太い穴)のいずれもうまく開けることができ、修理は完了。セット落ちを回避できた。

地方紙はメーカーの拠点と距離があり、緊急修理でいつでも力が借りられるわけではなく、自社の対応力が大切になる。現在は電気なども含めて対応できる者が増えているが、部員の高齢化も進んでいる。今後も教育に力を入れなければならないと思う。

CONPT 日誌

- 3月14日(木)クラブ委員会(出席8名)
第132回技術懇談会=全日空機
体工場見学、19名参加
- 4月11日(木)広報委員会(出席6名)
15日(月)企画委員会(出席6名)
18日(木)クラブ委員会(出席9名)
23日(火)第22回理事会(出席9名)
評議委員会(出席9名)
- 5月14日(月)CONPT-TOUR2024旅行説明
会(於日本新聞協会会議室・出
席16名)
16日(木)第4回定時総会(於日本プレス
センター10階Bホール・来賓3
氏、会員社23社31名出席)
第23回理事会(出席10名)
懇親会(於日本記者クラブ大会
議室・23名参加)
30日(木)~6月6日(木)
CONPT-TOUR2024

会員消息

■担当者変更

- * 椿本興業(4月15日付)
「新」竹内 広人氏
(西関東・信越SD装置第二営業部シス
テム一課課長)
「旧」平井 耕一氏
- * 椿本チエイン(5月1日付)
「新」宮田 和男氏
(営業統括第二営業部新聞営業担当主事)
「旧」方井 慎治氏
- * 富士フィルムグラフィックソリューション
ズ(5月16日付)
「新」久慈 享氏
(クロスアカウント統括部営業部販売課)
「旧」下平 泰生氏

■所在地変更

- * 富士通(4月1日付)
(〒212-0014) 川崎市幸区大宮町1-5
Fujitsu Uvance Kawasaki Tower

■退会

- * 富士通Japan(3月31日付)